

和歌九首：文苑

著者	受樂院，普行，下山，陸治
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 4
ページ	4 8 - 4 9
発行年	1894-03-05
URL	http://hdl.handle.net/2298/4364

文苑

明治己巳七月廿七日舟發品川灣

客員 吉 見 猛

朝出都門艤客舟。長風截浪浪悠悠。回頭品
海望中沒。髣髴青山認總州。

右次韻

又上方里一瀛舟。倚遍欄干眼界悠。吳客越
人互指點青螺。連處是房州。

同題

夜色朦朧月一灣。金波微動水漫漫。數聲瀛
笛船將發。客子爭凭亞字欄。

遠州灘口占

蹴浪火輪向志州。尋常不是許漫遊。夕陽已
沒富峰頂。明月衝高大嶋頭。四百鵬程過一
瞬。十三個國落双眸。雄心落々快無極。起倚
鐵欄發壯謳。

和具村況 (志州)

四十八

天然形勝自成寰。前控蒼洋後內灣。漁獲潑
刺魚築陵。歸漁舟。鱸響和瀾。山凝粉黛。青髣
髴。水疊皺波碧渺漫。更羨村風如大古。靄然
和氣一生安。

神明浦 (志州)

萬斛涼風滿袂時。夕暉沒盡玉兔飛。一聲欸
乃。天如水。舟自金波湧處歸。

朝霜 受樂院普行

有明の月の入にしほとにさは

白きは霜のわけるかりけり

梅花先春 全

大君の年のはしめにあはんどや

春をもまたて梅咲にけり

新年雪 全

大君の御代豊あるしるしとて

年のはしめよ降れるをら雪

朝氷 全

夜嵐にかけひの水や氷りけむ

今朝は流るゝ音もたえつゝ

山雪深 全

峰も尾もみち埋もれてうち見れば

たゞ白妙の雪のむら山

春 月 全

木の間も影さへ風にかはるなり

梅咲く園の春の夜の月

海 霞 全

海や雲雲や海ともよかぬまで

立つゝきたる春かすみかち

竹 雪 下山陸治

吹はちふ嵐もたえて竹の葉に

つもるまゝある雪の静けさ

雪中鶯 全

雑 報

○十分春色

暖風遅日、四山亦漸やく春色の濃やかあるを見る、満城賣花の聲、亦自から俗聲にあちす、若之夫れ放課の後、若し夫を一週の終、繰歩奏を聴うて郊外に出づれば、眞に是れ『柳展風前眼梅沾雨後唇』、柳豈是れ無情の縁あらむや、花や畢竟有意の紅、唯夫れ善く勉む者は善く遊ぶ、天の吾人を遇するや切、勉めて善く遊び、遊で而うして善く勉めずんば、此芳草名花九十の春光を如何せん

うめか枝にふりかゝりける白雪の

句ふを花とうくひすのあ

俳 句

親 心 子の初陣の遠百度

夏の朝 露の雪の秣刈

立つ烟 奥の栖を峠越し

音忍ふ 陰れ家に弾く月の琴

惜む花 和く吹けよ春の風

浦の春 霞の盗む嶋の景

月の琴 耳かたむくる立烏帽子

片田舎 年の暦は梅の花

空に見せ 御嶽涼まき夏れ雪